

ぷれみあむ
premium
みにっつ
minute

第2集

俺って、
こんな恥ずかしい状況で
逃げてたのね？！
の巻

☆ shiroa ☆

俺は成り行きで上司の呑み代までおごる羽目になり、その後むしゃくしゃした気持ちで電車に乗っていたのだ。そして電車から降り、一杯やらないと気が済まないと思ってラーメン屋に行き、呑みなおしたのだ。そこに出てきたしょうゆラーメンがまたしょっぱくて、ビールがすすむすすむ。お陰でかなり酔っ払い、なぜか店主が「お前さん、今日は何かあったね。これおごりでやるからさ、呑んでけよ」といって日本酒を飲んだのだ。

銘柄がなんなのかとか、さっぱり判らなかったが、とにかくガツンとくる日本酒だった。そして目の前がふらふらしてきて、帰ろうと思ったんだ。

ええと、何時頃だっけ。確か店を出る時に時計を見ているはずだ。テレビがついてて、その隣。テレビではリアクション芸人が手品をやっていたんだ。大きな箱に入り、顔だけ出して、剣をその箱にぶすぶす刺していくやつ。それで一本、本当に刺さって、「冗談じゃナイヨ！ 冗談じゃナイヨ！」とお得意のギャグをギャグではなく、本気で言っていたんだ。ちょっと血を滴らせてたけど、そこにはモザイクがかかっている、テレビの下には『番組上の演出です。さすが芸人さんは演技がうまいですね』とテロップが出ていた。

「ああ、あれ面白かったな」

いや、そんなこと思い出してる場合じゃない。ついつい口から言葉も漏れてたぞ。気をつけないと。いつも嫌なやつの前で心の声が本当にでちゃって損をするんだから。

時計は……、無理だ。判らない。

「ねえ何が面白かったの？」

もう、その話は置いとくんだよ、ミユウちゃん！

「昨日のワシントンってお笑い番組見て思い出しちゃったんだよ」

「ふーん。あたしその時まだ仕事帰りだから見てないや」

……閃いた！ ナイスだミユウちゃん。その番組がやってるのは夜十時半から三十分。だから十一時はまだ回っていなかったんだ。だいたい時間はつかめたぞ。

そこから俺はひとりで家に帰った、はずだ。しかしどうしても思い出せない。ラーメン屋では特別トラブルは無かった。きっとこの帰り道に何かが起きたのだ。

ということは、ラーメン屋から家に帰るまでの道のりを実際に歩いてみると何か判るかもしれない。

「ミユウちゃん、もしかしたら手掛かりが判るかも知れない！ ちょっと確認したいことがあるんだ。ちょうどカエルとハチマキもまけたみたいだから、ついて来てくれないか」

「うん、いいけど」

俺はミユウちゃんと共に昨日の夜訪れたラーメン屋へ向かった。ちなみに家からラーメン屋の方角は北北西だった。

パンダマン、何者なのだろう？

基本的に方角があっていたので、通り過ぎた距離を戻すようなかたちで俺はラーメン屋に向かった。さすがに体力を温存したい気持ちもあり、ゆっくりと歩きながら向かう。

「ところでミユウちゃんは仕事大丈夫なの？」

自分とはもかく、なんとなく巻き込んでしまった感があるミユウちゃんに申し訳なく、俺は聞いてみた。

「大丈夫もなにも、昨日で仕事辞めたから今はフリーよ。有給消化中。ヒマジン・フォー・オー・ピーポーよ」

全員が暇人ではないと思うが。

「はあ、仕事やなことでもあったの？」

「いわゆるセクハラ上司ってやつ。嫌な奴がいてさ、いつつも私の胸ばかり見てるのよ」

俺はふきだした。

「胸って、ミユウちゃん、ないじゃない」

綺麗な真っ平ら。きっとAカップとか、カップにならないくらいじゃないだろうか。男レベルな胸をしている。

「そう、あたしの自慢の胸を見て、『女だったらもっと色気出せ、胸を大きくしろ』だって。そんなことしょっちゅう言うから、セクハラだって言ったら、『じゃ、これがセクハラなら一緒に仕事できないな。俺が辞めるか、お前が辞めるか、どちらかひとつだな』、なんていうから。悔しいけどセクハラ上司がいなくなると仕事が回らなくなっちゃう、そんなのペーペーのあたしが退くしかないじゃない。頭にきて辞めてきたの」

「はあ、それで昨日はいつもより仕事が遅くなったんだね。引き継ぎとかで」

ミユウちゃんはすかっと頭空っぽな笑顔を作り、俺に言った。

「違うわよ。引き継ぎなんてそんなに無いもの。仕事が最後だから気の合う女の子とちよっと残って、お菓子を食べながらガールズトークをしてただけ」

仕事で遅くなったって、その理由でも会社にいるのなら言えなくはないのかもしれない。とりあえずミユウちゃんの時間の心配は問題ないようだ。一緒にいれるのは嬉しい。ミユウちゃんはどうやら俺に何か伝えたい用事もあるようだし、その用が済むまでは一緒にいてもらうことにしよう。

ほどなくラーメン屋についた。駅から割と近いところにあり、電車で帰る際にはよく夕食に使うことも多い店だ。

さて、ここから家までは徒歩十分。大抵歩き慣れた道で帰る。まっすぐしばらく繁華街……シャッター通りを通り過ぎ、左手に出てくる大きな公園を横切る。そしてほぼまっすぐの道でアパートまで着く。道自体は単純だし、変なところで曲がると遠回りになる。あまり寄り道しようなんて考えないだろうから、この一般的なルートで昨日も帰ったことが予想される。

「ミユウちゃんも、何か気になる場所があったら教えてね」

俺とミユウちゃんは目を皿のようにして怪しいところがないか探しながら歩いた。

「ねえ、ハヤト、あそこ怪しくない？」

ミユウちゃんが店と店の間にある怪しい路地の奥を指さし、言った。

覗きこむと誰かがアゲたような跡があった。すっぱいものが喉の奥にこみ上げる。

「あんなもののどこが怪しんだよ。気持ち悪い」

「だって、ハヤトは昨日酔っ払ってたんだよ。記憶が無くなるくらい呑んでたんだよ。もしかしたらあそこで吐いて、それで誰かとトラブルになったかも」

ミユウちゃんは真剣だ。

「あのね。明らかにあのゲロはご飯もの。俺は直近でラーメンを食べてたの。だから関係ないよ。それに、俺はどんなに呑んでも、酔っ払いはするけど吐くことはないんだ」

これは俺のささやかな自慢である。

「そうなんだ。ハヤトのじゃないんだ。う～、なんか急に気持ち悪くなってきた」

俺たちは再び怪しいものがないか、公園に向かい歩きながら探した。

しかし、特別有力な情報は見つからなかった。早くしないとカエルとハチマキに見つかってしまう。もしかしたらあの二人だけではなく、他にも変な奴が探し回っているかも知れない。そう考えれば、少しでもはやく手掛かりをみつきたい。

公園についた。公園の遊歩道を横切ると近道になるので、いつも歩いて帰る際には通る道。しかし特別怪しいものはみつからない、とその時だった。

赤いベンチがあるのだが、そこが明らかに怪しい状態になっていた。

「ミユウちゃん、ここのベンチだけ、なんか変だよな」

「確かに変ね」

赤いベンチ。そのベンチの真ん中あたりの背もたれの部分が塗り直された跡がある。しかもその塗り直された場所の赤いペンキが、人の背中の中で型がついているのだ。その型の真ん中に、横長の長方形の後が、薄くついていて、なんだこれは？

「あ、そうか！ これだったんだ！」

ミユウちゃんが言った。俺にとっては物凄く謎だが、いつもぼけっとしている天然のミユウちゃんには判ったのだろうか。いや、それはないだろうな。

「これ、だからハヤトが座った跡だったんだね！」

どういう意味？

「ははははは、ミユウちゃん、それはないよ。どんなに俺が酔っていても、こんなペンキ塗りたてのベンチに間違っただけで座るようなコントみたいなこと、俺がするわけないじゃないか」

ミユウちゃんはきょとんとしている。

「ハヤト、だって、背中」

背中？ 嫌な予感がした。俺は昨日仕事に出てからまだ一度も着替えていない。自分の背中を見る機会は無かった。

「まさか、ミユウちゃん、冗談きついで」

ははははは、と笑いながら俺は上着を脱いだ。そして背広の背を見た。

「うそん！」

俺は思わず声が漏れた。俺の背中には赤いペンキがべったりついて汚れていた。

俺、こんなんでも町中逃げ回ってたのか！

カエルやハチマキのことを言ってもらえない、俺も十分怪しい人物だった。とほほ。

「ミユウちゃん、俺、なんか泣きたくなってきた」

「しっかりしてハヤト、きっとコレが手掛かりよ。この背広の真ん中にも四角い長方形の跡があるじゃない」

確かにある。なんだこれは。

「これがきっと謎の鍵よ。これの正体が判れば、カエルさんたちが追っかけてる理由が判るかも！」

ミユウちゃんは落ち込む俺とは対照的に興奮気味だ。

「それにしても、ミユウちゃんも早く言ってくればよかったのに、人が悪いよ」

「あら、言おうとしたわよ。けど、ちょうどカエルさん達が追ってきて、逃げるのに一生懸命だったから」

そう言えば俺の服を指さして「服」って言ってたな。

「はあ、恥ずかしい。穴があったら入りたい！」

そんな弱々しいことを言っていると、ミユウちゃんが俺を一喝した。

「バカ！ やっと手掛かりがつかめてきたのに、そんなんじゃ捕まって大変なことになっちゃうかも知れないわよ！ こうなったら何が何でも逃げ延びて、解決させなきゃ！」

その通りだ。こんなところでうじうじしてたってしょうがない。

「うん、そうだよ。ミユウちゃんありがとう」

そして、ごめん。さっきミユウちゃんは天然だから、絶対いい気付きなんてないと思ってた。

「よし、じゃあまずは家に帰って着替えなきゃ。そして作戦会議だ！」

もしかしたらミユウちゃんが俺の部屋に入ることになるかも知れない、なんて下心も抱きながら鼻息荒く言ったが、さらにミユウちゃんが俺を一喝した。

「ちやう！ 今度向かうのは駅よ！」

ええええ！ なんで！

「どうしてだよミユウちゃん」

ミユウちゃんは眉をりりしくたて、俺を力強く見つめながら言った。

「背中についてた四角いの、そこに閉まってあるからよ」

その時、電話が鳴った。俺は上司からの電話かも知れないと思い、憂鬱になりながら携帯をとった。

「もしもし」

『私だ、パンダマンだ』

今朝の謎の人物だ。また、音声処理をされているので男か女かわからない。

「あ、今度は何ですか？ ちょっと今忙しいんですけど」

ミユウちゃんが心配そうに俺を見る。俺はなんとなく頭に手を置き、丸い耳を表現してパンダのジェスチャーをとろうとしたが、まったく伝わっていないようだった。

『うまくいったようだな。しかし、不味いことになった。カエルとタコ頭は自転車を手に入れ、追跡を始めたぞ。まだ町中にいるのなら、早く隣町へ避難することだ。あと、電車で移動してはいけない。駅は敵が張っている。通称シューター。背中の子の赤いペンキを目印に、ヤツは南ビルの屋上から狙撃態勢をとっているようだ。遠回りでも駅は避けて踏切を越えていけ』

シューター?! しかも駅はこれから向かおうと思っていた場所だ。

「ええ! 困りま……」

俺がぐちを言おうとした矢先、パンダマンは言葉をさえぎり、『幸運を祈る。また連絡する』と言って一方的に電話を切った。

「誰から?」

ミユウちゃんが訊いてきた。

「またパンダマンから。悪い知らせだよ。カエルたちは自転車を手に入れたらしい。これじゃさすがに俺の走りは追い付かれる」

少し、ミユウちゃんの顔も曇った。

「それは悪いニュースね」

「もうひとつあるんだ。駅にはすでに敵が張ってるらしい。しかもヒットマンみたい。俺の背中の赤いペンキを目印に狙ってるんだって。もう、これじゃ駅にいけないよ!」

「赤いペンキが目印なんて、かえってラッキーじゃない。逃げばいいんでしょ」

「あ、そうか」

「ぐずぐずしてられないわ。それじゃ、向かうわよ」

俺とミユウちゃんは再び駅に向かって移動しようとした。その矢先、ミユウちゃんは俺の腕を見て言った。

「そのジャケット、まだ着る気」

「まあ、高かったからね」

「べつとりペンキがついてたら、クリーニングしても落ちないわよ」

「そうだね」

「捨てちゃえば」

「……そうだね」

俺は公園のごみ箱にジャケットを捨てた。荷物が少しでも減ると、割と走りやすくなるものだ

。なんかミユウちゃんが頼もしく感じられてきた。

と、その時。俺が今向かっている公園出口の正反対にある入口から、自転車に乗った怪しい二人組が入って来た。カエルとハチマキだ！

「やべ、急ごう」

どうやらまだ向こうは俺に気付いていないらしい。今まで赤いペンキの背中を目印にしていたわけだから、ぱっとみただけではすぐに俺だとばれないだろう。そもそも、俺はあいつらの知り合いではないのだ。

俺たちは普通を装い、歩きながら公園を後にした。ちらりと影から公園の様子を窺うと、カエルとハチマキは問題のベンチの前で何やら話をしていた。

「気付かれずにすんだみたい。でもこの公園出たら駅まであまり隠れるところがないから、ダッシュで向かおう」

俺は走り出し、ミユウちゃんも自転車をこいでついてきた。シューター、一体何者なのだろう。本物の殺し屋か？ しかし、背中についてた四角いのってなんなんだ。ミユウちゃんは知っているのだろうか？

「ねえミユウちゃん、背中の四角いのって一体なんなの？ 何を知ってるの？」

「四角いのは何か判らない。だから今から確認に行くの！」

「じゃ、駅にその四角いのがあるんだね」

「そう」

どうしてそんなことを知ってるんだらう。瞬間嫌な予感がした。ミユウちゃん、本当はあいつらの仲間なのか？ いや、まさか。俺はさりげなく聞いてみることにした。

「ミユウちゃんは どうして四角いのが駅にあるのを知ってるの？ あいつらの事何か知ってるの？」

あちゃ、全然さりげなくなかった。

「知らないわよ。四角いのを駅のコインロッカーにあたしが仕舞ったの。う～、なんかおしりから話しても全然伝わらないなあ。頭から話すから、質問ばかりしないで聞いて！」

「うん、わかった」

ミユウちゃんは考えを整理したのか、少し時間を置いてから話し始めた。

「昨日仕事帰りにハヤトを見かけたのよ。ベンチに座ってて、見るからに酔っ払ってたわ。話しかけようとしたら立ちあがって歩き出したの。千鳥足で危なっかしいったらなかったわよ。そいで、暗がりだけど背中にべっとり何かがついているのに気付いて『どうしたのよ』と聞いてみたの。でもハヤトはまったく無反応だったのよね。で、よく背中をみると長方形の薄いものが剥がれかかっている感じでさ、角っこがぺらぺらしはじめてた。思わずそれを引っぺがしちゃったわけ」

「そういえばミユウちゃんって、昔っから新しい物買った時についてるビニールとか、いの一番にひっぺがすタイプだったもんね」

俺は中学生の頃を思い出しながら云った。そう、あれば俺がはじめてGショックを買った時だった。嬉しくて身につけて学校に行くと、当時隣のクラスだったミユウちゃんは俺のGショック

をみてつかつかと歩み寄って来た。俺はもしや今日こそ告白されるのではないか、と思っていたら「ハヤト、手をだして！」という。右手を出すと「ちやう、左！」という。そして差し出した左腕の真新しいGショックをむんずとつかむと、その表面に張ってあるビニールを引っぺがしたのだった。「あたしこれついてるの、貧乏くさくて嫌いなの」。その時ミュウちゃんはそう棄て台詞を吐いて去っていったものだ。

俺を思って言ってくれたのだと思うと、いまでも嬉しくなる思い出だ。

「あとプチプチも目につくと時間を忘れて潰しちゃうほうかも……って話が逸れるう。そんな話は今はおいといてさ。引っぺがしたものは長方形のビニール袋だったのよ。何が入ってるかはよくわかんなかった。で、なんかペンキもついててぼっちいから、とりあえず駅のコインロッカーに仕舞っというて、酔いが醒めたらハヤトにでも訊いてみようと思ったわけよ」

なるほど、それで珍しく朝俺に話しかけてくれたわけだ。ただの偶然ではなかったのだ。

「そうか、まったく覚えてないや。ラーメン屋から家まではイマイチ記憶がないもんな。う～ん、ベンチに座って休んだといえば休んだ気もする。その時に、なぜかそのベンチはペンキ塗リたてで、コントみたいにジャケットの背中にペンキがついた」

ぴんときた。朝っぱらから走って汗を流した成果か、酔いもかなり醒めてきている。もう少し考えればこの奇妙な逃亡劇の原因がつかめるかも知れない。

「ミュウちゃん、ナイスだよ。分かってきたかも。夜中にペンキ塗リたてのベンチって普通無いよね。ペンキを塗ったのにはわけがあるんだ、きっと」

「なるほど、それがあの長方形のビニールなわけね」

「ペンキと長方形のビニールってつながってるの……、ってそうか。つながってるのか！」

なんとなくペンキ塗リたてと長方形のビニールは別物と感じていた。うう、まだ頭は回っていないのか。

「つながってなきやおかしいわよ。論理的帰結ってやつよ」

「ロンリテキキケツ？」

いつもは天然のミュウちゃんだが、今日は冴えるなあ。探偵みたいだ。

「何者かが大切なものを隠すためにビニールに仕舞い、ペンキを塗ってベンチに隠したのよ」

勘がそこはかたく鈍い俺でもさすがにつながった。

「つまりだ。あのカエルとハチマキは、なんらかの事情で大切なものを隠す必要があった。そこでベンチに隠すことを思いつき、ペンキで塗って一見分からないようにした。夜の暗がりだし気付かれにくい。ましてや人通りの少ない公園で、そんな時間にベンチに座る人なんているはずもない。完璧な隠し場所のはずだった。けれどもそこでイレギュラーが起きた」

なんかこんな風に説明していると、俺自身も探偵に思えてきた。ミュウちゃんも興味深そうに聞いてくれている。駅ももう少しだ。

「よっばらいのハンサムボーイが酔い覚ましの休憩にベンチに座ってしまった。その際にペンキで隠していた謎の大切なものがスーツの背中に一緒についてしまった。さあ困ったカエルとハチマキはそのペンキで背中の汚れたスーツの男を追うことになった、とき」

「よくできました！」

ミュウちゃんが誉めてくれた。嬉しい。

「やっと追われている理由がこれで分かったね。けど、その大切なものって何なんだろう？ 何を袋に仕舞ってたんだろう。パンダマンは命に関わるって言ってたけど、それほど大切な物なのかな」

ミユウちゃんは眉間にシワを寄せて考えていたが、「こればかりは実物を確認しないことにはわかりっこないね」とこぼした。

もう駅は近い。パンダマンは駅を避けるように言ったが、ミユウちゃんの機転でシューターからの攻撃は避けられそうだ。駅のコインロッカーに仕舞ってあるのであれば避けるわけにもいかないし。

駅についた。入口はタイルの段差になっていて、走りの俺はそのままぽんと飛び越えあがった。ミユウちゃんは自転車なので、入口付近の駐輪所に自転車を置きに行った。その様子を見てみると、もはや不法投棄に近い状態で自転車置き場は置けるスペースを失っていた。とりあえず公道だがなんとなく自転車置き場っぽい、そこに停めてますよ、と伝わりそうな場所に駐車している。まあコインロッカーを開けて戻ってくるくらいだから問題ないだろう。

そんな様子を見てみると、肩と足に何か当たる感触があった。「いてっ」と言葉でいってみたが、実際にはたいして痛くはなかった。反射というヤツだ。石でも投げられたのだろうか。見回しても何が当たったか分からない。と、きらっと光るものが目に入った。パチンコ玉だ。目の前のビルの一階にはパチンコ屋が入っていた。すでに喧騒が聞こえている。こんな朝早くからパチンコってやってるんだな、仕事しろよ。そんなことを考えてたらミユウちゃんがかけてきた。俺にかけ寄ってくるなんて、もう一生無いかもしれない。ちょっと嬉しい体験だった。

「こっちのコインロッカー」

ミユウちゃんが先導し、俺はそれについていった。改札口の近くにあるコインロッカーの前に立ち、ミユウちゃんはバッグから鍵を取り出した。鍵を挿すと清算金額が表示され、ミユウちゃんは、早くといわんばかりに俺を見た。俺はなんとなく財布から小銭を出した。料金がゼロになり、鍵を回す。ガチャリと音がなり、扉が開く。シンナーの臭いがプンと漂ってきた。袋にしていたペンキの臭いだろう。

「なんかどきどきするね」と、俺は云った。

「うん、なんかどきどきしてきた」と、ミユウちゃんは云った。

心理学には吊り橋理論というのがあるらしい。別に好きでもない相手と一緒にいても、どきどきする環境を共に過ごすことで、相手のことが好きかも知れないと勘違いするのだという。

俺はこの時ほど吊り橋理論よ、合っててくれ！ と願ったことはない。

長方形のビニールの袋を取り出し、袋の中身を取り出した。それは宝くじだった。ドラマチックジャンボという宝くじ。当選賞金は一等2億円。前後賞合わせるとなぜか5億円にのぼるドラマチックな宝くじで話題になっていた。

俺は本能的にすぐにその宝くじをポケットに隠した。どきどきが加速していた。

「ねえミユウちゃん、本当にこれって、命に関わるかも」

ミユウちゃんの顔も青褪めている。

「とりあえずさ、パンダマンが言っていたけど、隣町に逃げよう。……どこか落ち着ける場所を探さなきゃね。ええと、ええと、電車！」

ファンと心地良い音が聞こえた。もうすぐ電車が到着する。券売機は空いている。俺はすぐに初乗りの切符を二枚買うとミユウちゃんの手を掴んで改札を抜けた。

「え、あ、あたしの自転車は……」

「鍵閉めてる？」

「うん、閉めてる」

「じゃ、大丈夫。他の不法投棄のような自転車はまだ回収されずにあるんだ。すぐ撤去されることはないだろうから」

ミユウちゃんはそれでも心配そうだ。

「でも、逃げるって、電車で逃げてもその先は徒歩だよ。逃げられないよ」

俺はぐっと手に力を込め、ミユウちゃんを引っ張る。電車は到着している。もうすぐドアが閉まる。もし閉まってしまうと、次の電車まで四十分待たされる。それでは逃げ切れない！

「あとで説明する。今はまず飛び乗ろう！」

“電車が発車します、白線の内側まで……” 音楽と共にアナウンスが流れる。あとちょっとで乗れる！ というところでドアが半分まで閉まった。もう、乗り込むことは出来ない。

目の前が真っ暗になる。駄目だ、無駄だった。これでは逃げ切れない……。

絶望がのしかかってくる。心臓に黒いどろどろした液体をかけられたように胸が苦しくなる。

と、そこでドアが開いた。考える暇は無かった。すぐに俺とミユウちゃんは乗り込んだ。

「助かった。とりあえず、これでなんとかなるかも」

「けど、どうしてドアが開いたのかな？」

「多分、誰かがぎりぎりですり抜けたんだよ。前にもそんな経験がある。挟まると一度開けてきちんと中に入るのを確認して閉めてくれるんだ」

「偶然ぎりぎりですり抜けた人なんて、この田舎の駅では少ないのにね」

「田舎も都会も同じだよ。家が近くても遅刻をするし、遠くても遅刻しない人は遅刻しない。そんなものさ」

遅刻常習犯の俺がいうのは、実に説得力が無かった。

電車の中は空いていた。通勤通学のラッシュが去ったローカル駅の車内はこんなものだ。だから本数が増えず、一時間に一、二本と不便なダイヤになってしまう。

俺はミユウちゃんとなるべく人から離れる場所の座席に座り、小声で話した。

「とりあえずこれでひとまず撒けたはずだ。奴らにとって俺たちが電車に乗るのは想定外だろうし、乗ってもどこに向かうか分からないはず。あのまま逃げていたのではカエルとハチマキが自転車で追っている以上、俺の走りでは限界があったし。そのうちスコットランドヤードみたいに捕まっていたはずだ」

「スコットランドヤード？ スコットランドって、イギリスの地名？」

……詳しくは分からない。

「えとね。スコットランドヤードっていうボードゲームがあるんだよ。泥棒と警察にプレイヤーが分かれて遊ぶんだけど……」

そんな説明をしていると、目の前をタコ焼きの臭いをぷんぷんさせた目つきの悪い男が通りがかった。腰には長い金属の菜箸のようなものを差している。

俺は説明を続けた。

「泥棒側は逃げ切るのが目的で、自分の番に数歩進めるんだ。で、警察側は複数のコマをそれぞれ一歩ずつ進めて、徐々に泥棒を追い詰め、捕まえるのが目的」

「へえ、そんなボードゲームがあるんだ。すごろくって運任せで先にゴールにつくのしか知らなかったな。なんか将棋とかチェスとかみたいね」

本当はたいして遊んだこともないし、頭の弱い俺は泥棒側でも警察側でも負けたことしかなかったんだけど。

たこ焼きの男はスコットランドヤードの説明をしている間に通り過ぎ、次の車両にうつっていった。

「そうなんだ、結構面白い、知的なゲームなんだよ。とりあえず判っているのがカエルとハチマキ。あと、シューターってやつもいるらしい。パンダマンは謎だが、他にももしかしたら仲間がいるかも。複数の敵がいる状態で包囲網を作られたら、俺たちはお手上げってわけ。そうそうに次のステージに向かわないとね」

「へえ、けど新しいところでも今度はあたしも徒歩になるし、機動力が落ちるわよ。もし敵に感知されてそっちで包囲網を敷かれたらアウトじゃない？」

不安そうな顔を向けるミユウちゃんに、俺は得意げに言った。

「だから新しいアシを手に入れる」

「アシ？」

ミユウちゃんはまだ心配そうだ。

「車を手に入れるのさ」